

風 韻

第
18
号

(昭和五十三年度)

神
戸
大
学
風
韻
会

風 韻 第18号 目 次

◎ 風韻会六十周年を終えて -----	師 匠	宇 治 正 夫 -----	1
◎ 神戸大学風韻会四十五周年を終えて ----	会 長	荒 川 祐 吉 -----	2
◎ 先 輩 登 場			
伝 統 の 重 み -----	旧 1	藤 井 茂 -----	4
風 韻 会 と 私 -----	新 3	杉 本 孝 昭 -----	5
三輪のふる里を訪ねて -----	新 4	里 井 三 千 雄 -----	6
お家元と羽衣と藤井教授 -----	新 4	牧 千 雄 -----	7
話 の 種 に -----	新 9	原 敏 郎 -----	8
声にかおりが -----	新13	戸次 威左武 -----	9
私 と 風 韻 会 -----	新21	木村 富士夫 -----	10

◎ 自 由 投 稿			
ジュニア部室今日この頃 -----	B 29	反 田 雅 之 -----	11
あ る 思 い 出 -----	J 29	佐 野 邦 子 -----	11
松 風 -----	E 29	嶋 畑 佳 久 -----	12
殺 人 ゲ ー ム -----	P 28	日 下 恵 津 子 -----	15
永 平 寺 -----	P 28	福 岡 真 裕 子 -----	15
◎ 誌 上 研 究			
能 ・ その 魅 力 -----	J 27	遠 藤 隆 -----	16
平 家 物 語 と 謡 曲 -----	P 27	樽 本 玲 子 -----	18

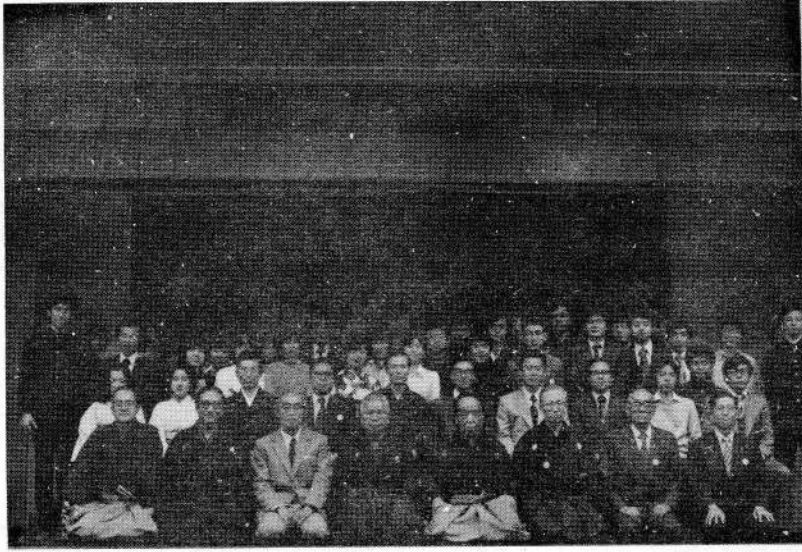
◎ あ お ぐ 会 報 告 -----	20
◎ 52年度活動報告 -----	22
◎ あ し あ と (昭 和 5 2 年 度) -----	26

◎ 新 役 員 紹 介 -----	27	
◎ 幹 事 長 就 任 に あ た っ て -----	J 28 田 中 千 晴 -----	28
◎ 昭 和 5 3 年 度 行 事 予 定 -----	28	
◎ 名 簿 変 更 通 知 -----	30	
◎ 風 韻 会 名 簿 -----	32	
◎ 決 算 報 告 -----	33	
◎ 伝 言 板 -----	33	
◎ 編 集 後 記 -----	34	



半蔀…………… 宇治正夫

昭和52年10月1日
於 大槻能楽堂



昭和52年秋季発表会 (於 神大学館ホール)



Jr合宿発表会(於 天上寺)

Jr合宿記念写真(於 天上寺)



風韻会六十周年を終えて

師匠宇治正夫

昨年は風韻会創立六十周年に当り春秋二回の記念大会を催しました。六十周年の長い歴史を飾ることができたについては、皆様の絶大な御庇護や御支援によるもので、誠に有難いことと深く感謝しております。神戸大学風韻会も四十五周年に当り、記念謡会を催しました。これもまた意義深いものであります。

大会の度に頭を悩ますことの一つは、会の当日御来聴下さる人が何人あるかということで、六十周年ともなれば賑やかでないかと恥かしくもあり出演者に申し訳ない事で、一人でも多めに越したことはないが来聴者に差し上げる弁当や菓子があまり余っても困るし足りない場合追加は現今の情勢では不可能で、その辺の見当をつけるのがむづかしい。しかし、四月と十一月の記念大会には観世宗家をはじめ、諸大家をお招きしてある事でもあり、一人でも多くの聴衆にお越し頂けたらと願っております。幸い社中の皆様が私の気持ちを汲んで誠心誠意、知人を招待して下さいだったので盛大な会をもつことができ、殊に十一月十三日の会は近ごろにない超満員の盛況となり多くの方々に喜んで頂くことができました。

謡はもとより能の型は流祖の勝れた見識によって生まれ、これを受け継いだ幾多の名人上手に依って洗練されて完璧なものとなり、ゆるぎなき芸術となったものであります。しかし、これを舞台で見るとき、演者が各自同じことをやっても、演者の心の深さによって受ける感じは異ってくる。反対に、見る方の側でも、見る人の心の深さによって感じ方が異なる筈である。演ずる者にとっても見る者にとっても心を深くもつ事が肝要であると思う。記念大会でうれしかったことは、少時間だけのつもりで来られた聴衆の中に引きつけられて終曲まで聴いたといわれる方が多かったので、これは出演者が緊張して心を深くして演じられたためであると思います。

風韻会六十周年記念大会を終って私は改めてこの芸術の偉大さを深く感じるとともに、皆様の御庇護や御支援に重ねて、感謝の意を表したいと思えます。神戸大学風韻会の記念会についても、学生諸君をはじめ、先輩諸氏の有難い御配慮を頂いたことに就いて、厚く御礼申し上げます。

神戸大学風韻会四十五周年を終えて

会長 荒川 祐吉

昨昭和五十二年は、神戸大学風韻会の四十五周年であり、また宇治正夫先生の風韻会の六十周年でもあるという、まことにめでたい記念すべき年でした。

宇治風韻会の六十周年記念謡会は、春は大槻、秋は湊川の能楽堂で家元を迎え、誠に盛大に行なわれました。ことに湊川では、通路にギッシリ補助椅子をならべ、それでもまだ足りずに立っておられた観客があつたほどの盛況でした。

そして、このように盛んな宇治風韻会のバックアップを受けて、わが神戸大学風韻会も、将来への飛躍のための画期的な足掛りをつくることができました。それは、昨年七月に宇治先生の特別の肝入りで催されました仰望会のおかげで、現役学生諸君の為に袴十五着を整備することができたことです。これには、先輩各位の大変な御支援を頂きました。

さらに十一月には、四十五周年記念謡会を企画し、併せて、宇治先生の諭らぬ御指導への誠意を表わすべく記念事業を企てましたところ、これまた多数先輩の温かい御支援を得て、予期以上の成果を挙げることができました。

こうして、無事四十五周年を終えて、改めて顧みますと、私は、何よりも、この長い期間、それこそ文字通り至誠一貫、この道の御

指導を賜りました宇治先生の存在の偉大さを痛感せざるを得ません。この先生の存在があつてこそ、われわれの神戸大学風韻会は持続し得たし、この共通の師を持ち得たという事実こそ、記念事業その他における先輩各位の積極的な御参加を得られた基盤であると思えます。

しかし、現在のわれわれには、更に、高商時代の大先輩が、春秋の現役学生の発表会に、あるいはその後の懇親会にも、常に参加して下さっているという喜びがあります。このようなつながりは、それこそ、同じ学校で、謡を習い、そして現在もそれに浸っているという、何ともいえない母校愛と仲間意識のようなものによって支えられているのでしょうか。

学校の形態は如何に変わっても、その学び舎の基本精神は連綿と受けつがれ、そして、八百年近い歴史の風雪、厳しい選択過程を経て残されてきた謡曲の世界に共に住むことができています。これが、わが神戸大学風韻会が、特に誇り得る先輩と現役の緊密なつながりを持ち得ている今一つの基礎であると思われまふ。

現在の現役学生諸氏の技量は、宇治先生の御指導と、学生諸君の「学ぼう」とする意欲とがかみあつて、見事に花開いていると思われまふが、これからは一層それを高めるべく精進してほしいと思ひ

ます。何でもそうですが、「これでよい」「これ位やったらもうよ
かろう」と思ったときは、その芸のみならず、そう思った本人の、
人間としての墮落がはじまるときです。

先輩各位に対しましては、私、会長として昨年の御協力に改めて
深く御礼申し上げますと共に、今後とも倍旧の御支援をお願い申し
上げたく存じます。今年は、またOB会を適当な時期に企画します
と共に、春秋の謡会を一層楽しいものにするこや、場合によつて
は、先輩だけの会を持つことも考えてみたいと思っています。

本年は神戸大学の前身の一つである旧神戸高商創立以来七十五年
に当り、盛大な祝祭が企画されています。そして、あと五年すれば、
われわれの会は五十周年を迎えます。四分の三世紀、半世紀の歩み
は、それがどんなに遅々としたようにみえようとも、そこに目に見
えない貴重な伝統を蓄積していくものです。ましてわれわれの風韻
会は、年々才々それぞれ個性に満ちた在り方をとりながら、一貫し
て着実に歩んできました。この蓄積が、必ずや、今後の発展に大き
な原動力となると確信いたします。

今から、新たな意気ごみで、宇治先生の御指導のもと、未来に向
って大きな一歩を踏み出したいものです。

昭和五十三年の年頭にあたりまして、至らぬ所感を述べてしまし
た。



先輩登場

伝統の重み

旧一回生 藤井 茂

一、風韻会、四十五周年と六十周年

昨年は神戸大学風韻会四十五周年に当り、記念謡会は現役の学生のほかに先輩・教官が参加して意義深いものがあつた。年を同じくして宇治先生の風韻会は六十周年を迎え、春秋二回の記念大会は聴衆堂に溢れる盛会であつた。四十五周年といひ六十周年といひ、人生一代にわたる年輪であり、私はその年輪の重さに圧倒されるとともに、二つの風韻会をここまで育ててこられた宇治先生の偉業に深い感謝と尊敬の念にみたまされた。

四十五年は私が宇治先生の門に入れて頂いてからの全期間であり、私の謡生活の全歴史である。私自身にとつても感慨深い年であり、記念すべき謡会であつた。

湊川神社能楽堂での風韻会記念大会に、私は数人の外国人を招待した。一人は神戸大学来訪中のニューヨーク市大学、ロートウィン教授、他は発展途上国から須磨国際研修センターに貿易実践研修のため来日中の人達で、そのほかに米花教授が招待された豪州国立大学のクローカー教授も最後まで熱心に観賞されていた。発展途上国

の人々は初めて接する日本の伝統芸術に感動したと讃辞と謝意を残して日本を去つて行つた。日本人にさえ難解といわれる謡や能に外国の人々が感動したというのは、一つには理屈やわざを超えた伝統芸術の力によるであらうが、一つには全心全霊をこめた出演者の真摯さのためではなかつたかと思う。真に日本的なものは国際的なものであることを知つたわけである。

二、ヨーロッパの伝統と日本の伝統

私は昨年の夏休みを利用して三十五日間、ヨーロッパ各地を歴訪した。今度の旅行は南山大学のロゴスセンターのカトリック神父（ドイツ人）の組織されたキリスト教研修旅行団に加つて、聖地や伽藍を巡歴するのが目的で、今までに幾度か訪ねたことのある寺院や伽藍も、そこに宿る精神と歴史を説明され、幾度かミサにも参加し、ヨーロッパの伝統の一端を理解しえたように思う。確かにヨーロッパにはキリスト教を柱とする精神の伝統があり、今日のヨーロッパ人の生活を支えている。街中^{まちなか}に聳える伽藍の塔はヨーロッパのシンボルであり、単なる建築以上のものである。

帰国して二カ月後に、旅行国の有志の人々と奈良の法隆寺、薬師寺、唐招提寺などを見学した。日本にもヨーロッパに優るとも劣らぬ宗教の殿堂があり、建築美以上の伝統のシンボルが残されている。ただひそかに憂えるのは、これだけの伝統をもちながら、今日の日本人のどれだけがこの伝統を心の柱として生活しているかの点である。

三 国際化と日本人

日本は今や国際化の時代であり、海外には日本の旅行者が溢れている。国際経済学を専攻する者の一人として、日本人のすべてが国際性を身につけることを願っている。国際化のためには相手国を知ることが必要であり海外旅行にもそれなりの意義はある。しかし、同時に忘れてはならないことは、日本人はまず日本人の生活基盤とこれを支える日本の伝統を知る必要があるということである。日本人が日本人としての自己を確立するのでなければ相手国からも理解されず相手国を真に理解することもできないであろう。

日本に伝統的な古寺社や謡があることは誇りであり、今日若い学生諸氏が謡に精進していることはこの点からも心強いことといわねばならない。

風韻会と私

杉本孝昭（E3回生）

風韻会が四十五周年を迎えたという。これは大変なことだ。どういふ風に変なのかを語る資格は私にはないが、ただ私とおなじ年ということは、特別に感慨が深い。

私の入会していた昭和二十八年〜三〇年頃といえば、朝鮮動乱がようやく鎮静し、いわゆる特需景気が消えて不況の長いトンネルに入りこんだ時期ではあったが、しかし、われわれ学生連中は、概して貧しい生活に甘んじながら、妙に、氣宇壮大なロマンや革新的な

氣概をもった人間が多かったように思われる。

当時、大学正門の手前であった学生集会所にはろくに教室にも出ずにゴロゴロしている連中がいて、それが将棋部や演劇部や、風韻会とかいうグループであると聞いた記憶がある。（ただし、その風評は全くの誤解であって、実際は風韻会の部員は学業も優秀で真面目な人達ばかりであることが分ったのだが。）私の入会の動機は、実は、能の幽玄の世界に魅せられてなどということではなく、神戸大学に入りながら会計学とか、マーケティング論とかの「実利的」な学問をいささか軽蔑していて、それへのアンチテーゼとして資本論や毛沢東の実践論の研究会で議論のための議論をしたり、学生集会所のボロ畳や破れ障子の雰囲気に入りびたったことが、何だか俗流に棹さして自立的な学生生活を営むことであるかのような、稚い客気があったように、今にして懐しく思い出される。

そういう「不純な」動機で、風韻会に入ったのだが、宇治先生や、二回生の先輩方の指導で初歩から、鶴亀・橋弁慶・小袖首我・・・と練習が進むにつれ、この世界の奥深さの不思議な魅力にひかれ、腹の底から声を出すことの爽快さ、先輩や仲間との交流の楽しさが分かってくるとともに、能楽・うたいの道の滅り張りのきいたけじめの確かさ、基本の大切さといったことに強く心を打たれたものがある。

実社会に入って仕事をして二十年を経た今日にしてしみじみ思うことは、学生時代の、教室以外での時間がその人の半生に大きな影響を与えるのだなあということだ。

私なりに、風韻会生活から教えられたことは、『腹に力を入れ、

肩の力を抜く。基本を大切にする。周囲に対する心くばり」ということだろうと思う。これらのことは、いずれもうたいに限らず、人生そのものに相通ずる大切なことのように思い、折にふれ、職場で若い人たちに話しているつもりである。

「一期一会」ということばを、私は好きで、その時その時の出会いを大切にしたいと思うが、私の人生にとって、風韻会の先輩後輩の皆さん方との出会いは、かけがえないものであり、今後大切に育てていきたいと考えております。

三輪のふる里を訪ねて

里
畠井三千雄（J4回生）

一昨年、十二年振りに関西へ舞い戻ってから暇を切った様に奈良、京都を暇を見つけては廻り出した。東京へ赴任する迄は地元いながら案外に行かなかったものが「故郷は遠くにありて思うもの」とやらで京都、奈良の古社寺、歴史への憧憬が一人であった。帰阪来、一年足らずであるが既にアルバムにして五冊撮り廻ったので我ながらピッチが早い。

さて、風韻子の需めに応じて何か雑稿をと思い立ち、やはり奈良に住む様になって頻訪している西の京、斑鳩の里散策のことを考えたが、昨年十月、山の辺の道を歩いたら謡曲「三輪」のふるさと「玄賓庵」を訪れたことを想い出した。

近鉄桜井駅を下車、前方に秀麗な大和のまほろば“国つ神”とい



三輪

われた三輪山が眼前になだらかな起伏をなし、いかにも御神体山にふさわしく聳え立つ。
古代市「海柘榴市」を起点に金屋石仏―翠松寺―、靈気迫る大神社を過ぎ三輪山の裾あたり、谷とはいえない浅い檜原谷に玄賓庵がある。

庵の前面には丁度みかんや柿畑が秋の実りをたわわにして、いかにも閑雅な高僧の隠れ里といった風情である。シテの第一声（次第）の「三輪の山もと道もなし。檜原の奥を尋ねん」が山門のあたりから聞こえそうな一瞬の幻想に襲われた。八世紀末の高僧玄寶は初興福寺で法相宗を学び、後、名利を捨てこの三輪の山蔭に隠れ住み庶民の暮しをしながら菩薩戒に一身を捧げたといわれる。謡曲にある玄寶僧都より衣を与えられた女は「わらわが住みかは三輪の里、山もと近き所なり」と歌を詠んで消えるが、この女は三輪明神の化身であり明神は巫女の姿となって現われ三輪神話を誇り舞い納める。玄寶庵本堂には重要文化財「不動明王坐像」や玄寶僧都の木像等が安置されているが、庵全体は荒廃しており、僅かに裏手の台地の傍らに「権悶伽の井」が下草に覆いかくされて見える。

しかし却って幽幻な雰囲気醸し出され、世俗を離れた玄寶の孤高が偲ばれる。

玄寶庵を跡にして檜原神社に向う途中の道からは二上山が一望出来る。私はそれから柳本古墳、神天皇陵、長岳寺を終わりとして山の辺の道と別れた

関西は古代文化の宝庫であり能のふる里としても、まさに源流地ともいえるべく多数の史跡がある。今后古社寺めぐりにこの「能のふる里行脚」も加えてみたい。謡曲への興趣が更に深められる様に見える。風韻諸子にもし同好の士があれば一緒に訪ねたい。

お家元と羽衣と藤井教授

新四回生 牧 千雄

いきなり藤井教授のお名前を題に掲げさせていただいたが、失礼をお許しいただきたい。

あれは、もう何年前になるのか、記憶も記録も確かではない。十一年前のとある年、西独はデュッセルドルフに、たった一軒しかなかった日本料理屋に、大勢の日本人が集まった。料理屋では、障子も衝立も全部とりはらって、全館を開放し日本人会の主催する「観世お家元歓迎パーティー」の座をしつらえた。お家元はじめ、日頃は舞台で遠く拝見する斯道の名人上手が一堂に集まられ、パーティーは極めて和やかであった。遠く日本を離れていながら、日本では言葉交すこともできない、いわば当流の帝王があまりに傍近くおられ、「私も御流のはしくれの素人で、宇治先生のご厄介者です。」と申し上げた挨拶に、「ご苦労様です。ご精進を」とお答えいただいて、やゝ興奮気味であったことを記憶している。馴れぬ欧州の長旅のこととて、お家元も、幸祥光先生も、藤波順三郎先生も、やゝお疲れと見受けられた。お家元とすれば理由はともあれ「杜若」の業平みたいな感想を或いは、お持ちであったかも知れない。

別の機会に、デュッセルドルフから五十キロ離れた古都ケルンで梅若万三郎先生の「羽衣」を見た記憶がある。これも日時はもはや分明でない。勿論、能舞台が芳若う筈もなく、ケルンの日本文化会館のステージに、やや横にゆがんだ紙製の鏡板と、天井からぶら下

げた破風屋根が、何ともわびしい印象であった。それでも、西独と云う、観能の機会がそれこそ盲亀の浮木みたいに少い土地で、敷舞台のツギ目を気にしながら歩を運んで、長絹の袖を天冠にかざした天女は、私にとって、まさしく夢の中の「羽衣」に等しく、不思議な興奮を呼びおこされた。

藤井教授をお迎えしたのは、これまた何時のことであつたらうか。日本料理屋で一緒に居たあと、お宿まで、徒歩でお送りした。車では少々短い距離であつたし、私には少しでも永く、お傍にいたい下心があつたので、無理にお歩きいただいた。人通りが無いわけではなかつたが、殆ど真暗な裏通りを、(本当は三尺下るべきではあつたが)教授と肩を並べてゆっくり歩きながら、「謡おうか」と云われるお声に、やゝ酒の入つた私は一も二もなく同吟した。教授は免許皆伝、こちらはうる覚えながら、まず「玉鬘」を一ふし、謡ううちに「螢に乱れつる」と云うところで、あやうく涙が出そうになつて、私はちよつと横を向いた。ホテルはもうすぐであつたが、私はそ知らぬ顔で道を一本曲つて遠まわりをし、続いて、「天鼓」を同吟……もはやそこはデュッセルドルフの裏町ではなく、百万ドルの夜景を目の下にした六甲台の学生会館であり、阪急へおりる急坂であつた。ついには、教授と腕を組んで高吟する私の前に、軽く響くドイツ女の靴音も宇治先生の下駄の音かと思えたとき、周囲が明るくなって、ホテルの前に出た。

お家元のご挨拶も、ケルンの「羽衣」も、いかにも嬉しいことで、風韻会との縁あればこそその思いであつたが、藤井教授との一夕は、その数万倍の神経の亢ぶりを私に残した。百番集だけは大事にトラ

ンクの底に入れて西独に赴いたにもかかわらず、心の底から懸命に謡つたのは、在独八年間、これがたつた一回の記憶、しかも無本であつた。

ようこそ、私をお訪ね下さつた藤井教授と、骨のズイまで謡の心を教えこもうとされた宇治先生に、改めて感謝申上げる次第である。

話の種に

新九回生 原 敏郎

人間社会面白くないことが多々あるが、これは煎じつめれば他人に対して腹が立つことがあるということではないだろうか。ある物の本にどうでも良いことではあるが、腹が立つこととして次の様な例があり成程と思つたので皆様にも何かの話の種にしてもらつたらと思ひ、ここに紹介する次第。

- 一、無才識者作好官
- 二、善人被小人凌辱
- 三、見初学人及第
- 四、俗夫有好妻
- 五、村漢有銭

(一)は才能も見識も無いつまらぬ人間が好い役に納りこんでいること。(二)は善い人がくだらぬ人間に見下され辱しめられていること。

これらは、会社と言わず世の中の組織の中ではよく見られることであるが確かに義憤を感じるのだ。源氏鶏太のサラリーマン小説も案外こんなことが基本原理なのだらうし、会社終了後町の酒場がは

洋菓子で全国的に有名な神戸・山手・中山手・H・フロイントドリーの技術習得者が、神戸で初めて阪神御影駅の山側で「リヨン」という名で開業しております。御散策のおついでなど御気軽に御立ち寄り下さいませ。

手作りの洋菓子 リヨン

神戸市東灘区御影中町1丁目9-4
☎ 841-1248

やるのも、こんなことに怒りを感じた人がつめかけるからであろう。(三)はまだ勉強し始めのホヤホヤが運よく難しい試験に及第して、得々としていること。日頃は自立たぬ学生が在学中に司法試験に合格して、卒業後大学に残りあれよあれよという間に助教、教授になるという例はよくあることだ。一片の試験で人を選抜する試験制度にケチをつけたところで勝てば官軍だ。仕方あるまい。(四)はつまりぬ男が好い女房を持っていること。これも腹が立つことではあるが賢士に美人の女房がいたのでは、あんまり揃いすぎているので、世の中の公平という意味では、俗夫有好妻もいいではないか。(五)は田舎っぺが銭を持っていること。成金さんということだろう。

風韻会の諸兄の中には、右の例が当てはまる仁はおられないので今年も気持ちのいいお付き合いをさせていただきたいと思っている。

声にかおりが

新十三回生 戸次威左武

確定申告期限の三月十五日が近づくと、お客さんが次から次と来て下さる。まるでよくはやるお医者さんのようで、待合室が欲しいと思うのは一年中でこの時期だけである。

いろいろな人が来て下さる。そしてその人それぞれ違う声をしている。赤銅色に日焼けした漁師のドスのきいた声、鮮魚を売っている主の威勢のいい声、少し力を入れると演説調になる町会議員の声、どこか弱いところのある呉服店の旦那の声、なんだかほこりっぽく聞える織物製造業者の声、・・・何とも面白い。

そんなある年の三月、風邪でひどく声のかすれた人が来られた。ほとんど息だけで聞きにくい。その人と話していると、だんだんとこちらの喉もおかしくなってきた、喋りにくくなっていった。帰られた後、うがいをして声をならすのであるがなかなか直らない。その時、声というのは聞いている人に大きな影響を与えるものであると感じた。

また、ある年の冬、従業員さんと、ある歌手のコンサート聞きに行った。その歌手はすごく高音の出る歌手で、音響効果の良い舞台から、金切声（その歌手には失礼だが）でこれでもか、これでもかと、ががが歌いまくった。その後一週間ほど喉が痛かった。その強烈な声にあてられたとしか考えられない。

僕は声にはそれぞれかおりがあると思う。風邪でかすれた声、しわがれた声、金切声等は、悪息を放つ声であり、まわりの人に害を与えらる。聞いている人を愉快にする声はいいかおりの声である。謡も良い謡はすてきなかおりがする。レモンのようなかおりのする謡が謡いたいと思っているのだがどうであろうか。

私と風韻会

純 久

「男はつらいよ」という題名の映画をご存じでしょうか。そう、あのフーテンの寅さんを主人公にした映画です。この映画は正月と盆の二回製作して二十本目だそうです。つまり十年目だという事です。私と風韻会とのつながりも十年目に入りました。だから、大学の想い出よりも風韻会との想い出の方がよく残っています。もっとも大学とのつながりは四年で切れているのに風韻会とは今だに顔を出してつながっているからあたり前の事なのですが。

ですから、春夏の合宿には卒業してからも参加させてもらいました。特に夏合宿には毎年顔を出させてもらいました。謡う方からはいぶ遠ざかっているので現役の人達には、迷惑をかけてばかりでしたが。最近の合宿は国鉄運賃上げや宿泊代の事もあり、近距離の所ですましているようです。私の現役の頃は信州の方ばかりでした。夏休みは合宿費をかせぐのにアルバイトに精を出したものです。合宿は今と違って八月下旬にありましたから。合宿の最後にやるス

タンツも面白いものでした。よくもまあこれだけの芸達者が風韻会にいたものだと感じたものです。

秋季発表会にも毎年出席させてもらっています。最も謡う方は先に述べた通りなので遠慮していますが。最近の発表会はOB会の影響でしょうか、先輩方の姿が増えています。喜ばしい事です。

風韻会から足を洗うと言うとおかしな言い方ですが、実際もう良加減な年令になっているのだから（私の小学校時代に生まれた人が現役の学生に在る）あまり会合の度に顔を出していると後輩の皆様嫌われるのではないかと、いやひょっとしてもう嫌われているのではないかと考えてしまいます。でも風韻会は、私にとって青春の想い出、青春の故郷なのです。発表会でうまくできなかった時は、自分に情なくなったり、泣きたくなったり、うまくできれば喜んで、皆の集まりが悪いと言って怒ったり、今となっては全て懐しい想い出です。

ジュニアの部室がどうなっているのか、あの落書きノートはまだあるのだろうか。六甲台の部室の扉のあのガタピシという音は直ったのだろうか、あの小さな電気ポットは今でもシューシューいいながらお湯を沸かしているのだろうか。青春の四年間は、あっという間に過ぎてしまいます。だから後悔しないように、大事にして欲しい。卒業までの年月を大切に青春を悔いなきものとしてください。私ですか？私にとって風韻会はまだ卒業できないんですよ。それでは……。

自由投稿

ジュニア部室今日この頃

B 29 反田雅之

ジュニア部室と言っても、「はて」と首をかしげられる先輩方も多いのではないですか。Jr部室とは、教養部にある一、二年の部室なのですが、六甲台部室のような練習の為の部室という感覚からは程遠いものです。一口で言えば「憩いの家」というような所でしょうか。暇を持て余した部員がここへ来ては昼寝をしたり、トランプをしたりするわけです。

つい最近まで、ここには外部侵入者が多かった様です。この畳を目当てに泊まりに来る者、更衣室代わりに使う者、果ては、ここを自分の家としてしまった犬など……。

でも昨年十一月に、馬術部からいわくありげなドアを譲り受けたのを機会に鍵を付けてみました。いい感じで出来たのでそれではと畳を床から上げ、窓にカーテンをかけることを計画しました。カーテンは女子の協力で難なく出来たのですが畳を上げる段には苦勞しました。一斗カンに砂を詰め土台とするのですが、この砂の詰め口が又小さいのです。辛かったですよ。軽蔑のまなざしに耐えつつ、

砂遊びをしなければならなかったのは。

今では、壁にピンクレディなどのポスター、窓にはチェックのカーテン、畳に赤いカーペット、そして温かいストーブと、Jr部室はにぎやかです。でもでもこの華やかさの下には我が風韻会土方愛好会の涙の戦いが秘められているのです。

ある思い出

J 29 佐野邦子

あれは、私がまだ中学校に上がる前のことだった。市電の中でまたまた、あるみずぼらしい老人の隣に私は立った。その老人は、髪はボサボサで、鬚はボウボウ、今にもノミかシラミをうつされそうなほどであった。突如として電車が揺れ、その老人が私の方に倒れかかってきた時、私は思わずよけようとした。しかし、その時、まだ純心で善良だった私は、その老人を倒れないように支えてやった。その後、私と老人は同じホームで降りた。私が老人の後から電車を降りた時、その老人は、突然に、私の方をふり返り、「君はきれいだね。本当にきれいだよ。」と言い、どこへともなく立ち去ってしまった。私はあ然として何も言えなかった。あれほど真剣に「きれいだ」と言われたのは初めてだった。そして、なぜかそのきちゃな老人の目が妙に美しく思えた。おそらく「きれいだ」という言葉はその老人の私に対する最高の感謝のしるしだったのであろう。

以来、私は人は外見よりも、心のやさしさが肝心なのだと思っている。否、そう思って自分を慰めてきた。そして、この思い出のあ

るせいか、私は決して「めんくい」ではない。そのため、よく美的感覚を疑われるのだ。

しかし十九にもなると、さすがの私もあせるのである。この頃では毎晩化粧水を塗りたくりながら、ふっと考える。あれは幻だったのだろうか。そしてあの頃とちっとも変わっていない自分の顔を見つめ、溜め息をつくのである。

松 風

E 29 嶋畑 佳久

ワキの僧と狂言方との問答が終って間もなく、橋掛りからシテとツレとの出になる。いずれも目の醒めるような純白の衣から腰巻の紅がこぼれ出た松風と村雨が、橋掛りに向かい合って、砂地にしみ入る霧雨のようにもの静かに一声を謡い出した。

「汐汲車わづかなる浮世に廻るはかなさよ」

暗く深くもつれるような、それでいて凜と気迫の籠もった声で縷と謡われるその最後の「はかなさよ」という一句が、妙に心に残った。それまで能楽堂にしてはやや強い照明に、舞台の磨き立てた檜の床板が、あまりなめらかに輝いているのに気を取られていた嶋畑は、急に注意を呼び起こされた。もとより耳は何物にも妨げられずに聞いていた筈だから、すぐ耳の中で言葉が前へ手繰られて、「汐汲車わづかなる浮世に廻るはかなさよ」という、天折を思わせる、姿の良い詩句が、まとまって頭に浮かんだ。その時、嶋畑は、我にもあらず戦慄していた。

謡はすぐに次の句へ移り、

「波ここともや須磨の浦、月さへ濡らす袂かな」

で連吟が終わると、

「心づくしの松風に海は少し遠けれども」

とシテの松風のサシが始まった。

杉浦元三郎氏の声には、面と衣装こそ美しい女に装われてあれ、女の色香を思わせるようなものは何ひとつなかった。だが、その声には凜とした気迫が籠もっている。聞くうちに言うに言われぬ優雅の霧が漂い出て、次第に夢幻の世界へと誘われてゆく。あたかも荒れた殿居の一隅に、調度の螺鈿が月影を受けているのを見るような心地がする。この力強い声を通してのみ、松風の潮垂る悲しみと、幽界の暗い恋慕の迷いが、初めて感受されるという気がしてきた。

嶋畑には、いつしか目の前に移りゆく情景が、現か幻か定めがたくなった。すでに舞台の磨き立てた檜の床は、波打際の水鏡のように、二人の美しい女の白白衣と紅腰巻のきらめきを映していた。色彩の鮮かな対照。

再び、今謡われているサシの詞章と重複して、最初の一声の詩句が執拗に心を追って来た。

「汐汲車わづかなる浮世に廻るはかなさよ」

思い出されるのはその一句の意味ではなく、橋掛りで相対したシテとツレが謡い出した時の、完全な静寂に謡の雨が降り添うた瞬間のあの名状しがたい戦慄の意味であるらしかった。

あれは何だろう。あの時、確かに美が歩み出したのだ。浜千鳥のように、飛翔には馴れても歩行は覚つかない、白い足袋の爪先を、

美はわずかに我らのいる現世の方へさし出したのだ。嶋畑が、そう認識した瞬間、美は存在に入った。あのイギリスの文豪、オスカーワイルドが、「ロンドンの霧は詩人がこれを歌うことによって存在に入った」と言っているように、嶋畑が認めることにより、美は彼の意識に上ってきたのだ。

そういう嶋畑の思考のかたわらを、「松風」の能は、つかの間も滞らぬ情緒のせせらぎのように流れ続けていた。

「かくばかり経がたく見ゆる世の中に、羨ましくも澄む月の出汐をいざや汲もうよ」

舞台の月影の中を、謡いかつ舞っているのは、もはや二人の美しい亡霊ではなくて、言うに言われぬもの、たとえば時間の精、情緒の具象、うつつへはみ出した夢の滞留と言ったものなのだ。それは目的もなく、意味もないが、この世に在り得ぬほどの美だ。

その時だ。不意に宇治先生の言葉が頭に浮かんだのは。それは何の前触れもなく、あたかも神の啓示のように現われた。

「理想に達することは不可能のことであるが、高い理想を持って一步一步それに近づく時こそが真の幸福であり、尊いものと思う」
 美の世界を深く掘って行くと、どこまで掘って行っても行き詰りが無い。ここまで美しければ、もうそれ以上の美は求める必要がない。このような終点が「美」にはない。そして、我々の感ずる美は無限の美を予想し、その無限の美に到達することを念願としている。このように無限の美を我々が予想し、心に描くことができるのは、すでに我々の心のうちに「無限の美」が密かに宿っているからなのだ。外形は有限な肉体でありながら我々がこのように「無限」の美

陽気にどうぞ!

パーティ、コンパの予約を受け付けております。

バイキング 食べ放題 お一人さま ¥750

三番街 (東神ビル4F)

三番街 三映 三番 西口 阪急三宮 国鉄三宮

フュージョンパブ カンタバリ 三番街

を追求しなければどうしても完全に安心ができないというのは、我々の内部には「無限制性」が宿っていて、その「無限制性」の開頭を内部から要求してやまないからなのだ。

雲間を洩れる月影のように、時あって笛の音が、彼の現身を貫ぬいた。

「有情輪廻して六道に生ずること、猶、車輪の始終無きが如し」と見る間に、舞台の上の汐汲車の車輪はとめどもなく廻り出した。

その後は放心状態が、観客の拍手を聴く時まで続いた。もはや何も考えることはできなかった。ただ見守るばかりであった。松風が物狂おしいありさまになり、形見を身につけて舞を舞い、行平の名を呼んで松の木にすがりつく。死後もなお行平を慕い続ける幽界の暗い恋慕。だがこの時ばかりは、鳴畑自身にもわけがわからぬほどの不思議な考えがひらめいたのだ。本当に松風という女性は存在したのだろうか。記憶と言っても、それは映る筈もない遠すぎるものを映しもしれば、それを近いもののように見せもすれば、幻の眼鏡のようなものだ。しかし松風がはじめからいなかったとすれば……鳴畑は雲霧の中をさまよう心地がして、今ここで能を見ていることも半ば夢のように思われてきて、あたかも漆の盆の上に吐きかけた息の曇りがみるみる消え去ってゆくように失われてゆく自分を呼びさまそうと思わず叫んだ。

「それなら、村雨もいなかったことになる。幽界の暗い恋慕もなかったことになる。そして、もしかしたら行平さえも……」

夜明けとともに、松風と村雨は僧に弔いを頼んで消え失せる。後

には何も無い。ただ赫奕と昇る日輪に照らされた須磨の海と吹き抜ける松風が残るばかりだ。これと言った奇巧のない、閑雅な、明るくひらいた海岸である。数珠を繰るような波の音がこれを領している。

そのほかには何一つ音とてなく、静寂を極めている。この海には何も無い。記憶もなければ何も無いところへ、自分は来てしまったと鳴畑は思った。

須磨の浦は、れい明の中でしんとしている。

(後書き) まだ一度も「松風」の能を見たことがない自分が、何とか未観能記を書きあげることができたのは、伏見和政さんと遠藤さんのおかげです。ここに厚くお礼申し上げます。



本店 六甲本通り TEL 851-2096
高羽常盤木バス停前 851-4512

宴会ホールも増えて広くなりました
忘年会、新年会、コンパにご利用下さい
宴会パック 1人2,000円より
鍋 パック 1人2,000円より

中華菜館 **六甲苑**

阪急六甲駅北側2・3・4階
☎ 821-4868・851-6970(代)

殺人ゲーム

P 28 日下恵津子

今朝みた夢は、何だかとてもこわい夢だった。

夢の中の私は、部屋の隅でいっしょうけんめい考えているのだ。

「あの事件は、たしか夢でみた事件だ。あれも夢だった。あれはどっちだったかな。現実だったかな、夢だったかな……まあ、どっちでもいい。あの時は、私が直接手をくだしたわけでもないし。それから……あれはどっちだったのだろう。あれは確かに私があいつを殺った。あれは夢の中だったのかな、現実だったのかな。ああ、ちやんと思いきなきややばいのに、ちっとも思いつけない。」

思い出しているうちに、私の夢は、あの殺人事件の現場に場所を変えてしまった。その夢はカラーではなかった。だけど、白黒であるがゆえに、いっそう迫力を増す場合だ。あるのだ。私は、恐くて、興奮して、思わず目をさましてしまった。

汗びっしょりのまま身動きもせず、開きっぱなしの暗い押入れの奥を見つめながら、私は思った。

「そうか、わかった。あれは夢だったんだ。私がほんとうに殺ったのはあの時だけなんだ。」

私はほんとうに不安になった。夢であろうと夢でなかりうと、もうそんなことどっちでもいいのだ。とにかく私は人を殺した経験があるのだ、という事実を、どうしても否定できなかった。否定でき

ないのではない。私は確信しているのかも知れない。今、私の部屋に警察がはいりこんできて、「君を殺人の容疑で逮捕する」と言ったら、きっと私は、すっかり観念して、刑事についていくだろう。

永平寺

P 28 福岡真裕子

十月半ば、私は、何の目的も持たず旅に出た。そして、つぎの二つの寺に立ち寄った。

那谷寺は真言宗のお寺で、岩場の中に本堂があり、自然の中にとけこみ、人を寄せつけないある一種の厳しさと同時に、限りない広がりを持つ寛容さを感じさせるのである。

それに対して、永平寺にあるものは人為的な美しさであった。観光ルートに組み込まれた哀しさとも言うべきであろうか。ひとつひとつが洗練され、その集合体としてのお寺、永平寺が自然から浮かび上がって見えるのである。これが建立された時代のあの厳しい気風はどこに行っただろう。その時の愕然とした気持ちを救ったのが、雲水さんの存在であった。彼らは、昔のままの修業を積み重ねていたのである。その修業の中に建立された当時の気風が受け継がれていると思った。

本当に生きのびるものは何なのか、今それを考える時代が来ているのだと私は強く思う。

能 その魅力

J 27 遠 藤 隆

感涙ナガレ身ハ仏

独楽ハ廻レリ指尖ニ

カガヤク指ハ天ヲ指シ

極マル独楽ハ目ニ見エズ

円転無念無想界

白金ノ独楽音モ澄ミワタル

能を見に行つて、印象に残る事、囃子の掛け声。衣装の美しさ。白い足袋の美しい動き、そしてその独特の構えであった。歩くにも足の運びと上体とは、無関係に保持されていて、その身体の軌跡は床と平行である。つまり能の動きは、常に弾力を携めた腰で支えられたままの、身体の幾何学的な演技の流れとでも言えようか。能の魅力は、いろいろあると思うが、この構えそのものからくる美しさもその一つだろうと思う。ある本に『能の構えは、重心をおとすという単純な演技術ではない。あくまで重心をおとす意志と天に引き

あげられるような逆方向の力との引きあいというか、前に引く力に対しては、後に引く力という風にあらゆる方向と逆方向のきわどいバランスに保たれているのである』とある。この構えの持つ要素と、現在の舞台の持つ構造（見者は、演者の側面からもながめられる）とが重なり、能は、彫刻的な美しさを持っていると言われることになるのだろう。

しかし、能の美が彫刻的なことに終始するならば何で能の必要があらうかということになる。その彫刻的な美しさが持続しつつ現在の点を中心としてその雰囲気を保ちながら次の点へ移ってゆくその変化の妙こそその求めるものではないのだろうか。その変化には、激しい動きの変化から、静かな変化。そしてついには舞台の中央に動かずに静まりかえっているという進行の状況もあるだろう。その変化もまた一つの魅力である。

能において動かぬことは、どういう意味を持つのだろうか。つまり先程のべた変化のうちの舞台の中央で動かず静まり返っているときである。一つ一つの点である雰囲気を保ちながら変化するものが能であるとするなら、静止の状態は、その状態で私達に何かを語りかけねばならないのだから、非常に高度な表現内容を持つと言わねばならない。能の型は、他の舞踊に比べるとその数は、少ないといえる。これは、能がある表現をするとき、いかにして動きを少なくし、ギリギリの線まで減らし、それによって残された重要なものの密度をさらに高めようとしていったかを示すものといえる。能がこのような進化形態をたどったとすれば、静止の状態は、まさにその極限といえるだろう。怒り、悲しみ、喜び、愁いをわずかな面の動

風流味処

御宴会の御予約も
受承っております



鍋物・会席料理
やきとり・山菜色々

お座敷風鳥の店

鳥一東店

神戸市灘区弓ノ木町5-3-17
☎ 822-1350

鳥一

神戸市灘区森後町2-3-17
☎ 851-7512

き、きりつめられた型で表現する能は、まさに人生の激しい激的場面を演ずることによって表わす近代演劇とは、まったく対のものと言いうことができる。

ここまで書いてきて、思うこと。もしも能が型によってのみ演ぜられる、つまり、定められた型通りに能の動きがなされたとしたらその動かぬことよって無限の想像力をかきたててくれるはずの型も、何ら訴えてくるものはないのではないかと思うのである。静かな序の舞を見るにしても眠気をさそうものと、それにひきこまれ、気がついたら終っていたという違いが生ずるのも、この点に理由があるのでは、ないだろうか。私は、能の持つかくされた美しさを期待すべく、そういう能に出会える機会を求めて能を見に行きたいと思う。



私は、観客の立場だけでなく、クラブにおいて謡、仕舞をやっていく関係上、演ずる立場からも少しではあるが能を見られるということに幸運な事だと思っている。能の持つすばらしさを少し理解しかけた自分をさらに深く導いてくれる手段ともなりうるだろうからである。私は、先程述べたような良い能に出会って、それを良い能と意識すべく努力しなければならぬと思っている次第である。

平家物語と謡曲

P 27 樽本玲子

謡曲は、古典文学の集大成であるといわれている。それは、特に有名な源氏物語、平家物語をはじめとする数多くの作品を基盤にして創作されているからである。だから、古典文学作品を解釈するにあたって、謡曲における理解のしかたを参考にする場合も多く、さらにはまた、音声学上においても重要な資料となっているのである。ところで、謡をやりながら、その典拠となっている作品を読むのは非常に面白く楽しいものである。また逆に、作品を読んでいて、その中に謡曲にあるのと同じ文句を見つけたときの喜びもまた格別である。私は国語を専攻している関係上、この喜びを味わうことが多い。そして、その作品というのは、ほかでもない平家物語なのである。一口に平家物語といっても多くの諸本があり、それぞれ異なる特徴をもち、それらの間には著しく内容の違うものもあるので、ここでは、その中の流布本に限定して話を進めていきたいと思う。

平家物語を典拠とする謡曲は、御承知の如く、「敦盛」「清経」「頼政」「忠度」「実盛」「屋島」「兼平」「小督」「千手」と、数え上げればきりが無い。どうしてこのように多くの曲が平家物語から取材されているのであろうか。ここでは、この問題に関して、平家物語と謡曲とに共通するものは何かということを中心に考えてみたいと思う。

平家物語と同時代の軍記物語に、保元物語と平治物語とがある。

あまり知られてはいないが、保元・平治物語共に語り物として、平家物語と同様に世間に流布していたらしい。しかし、それにも拘らず、謡曲の資料とはなっていない。つまり、保元・平治物語で活躍する武将は、能のシテとなり得ていないのである。そうすると、平家物語にあって保元・平治物語にない要素は何であろうか。国文学史解説書の平家物語の項には、どの本を見ても、「軍記物語中、最も文学的価値が高く、後代の文学に強い影響を与えた」とある。そこで、この要素は文学性ではないだろうかと予想してみた。確かに平家物語は、合戦の叙述は壮烈であるし、多くの人々の人物描写及び心理描写も見事である。平家一門の人々が、それぞれ平家という一族の運命を担って滅びていく悲劇、また平家一門に限らず、時代の歯車にうちひしがれていく弱い個人の運命。これらを、人間的な悲しみをもって読者に強く訴えようとする、時代を象徴した文学であるといえる。保元・平治物語と比較して、より感傷的・浪漫的であり、散文というよりも韻文的イメージが強く、一種の詩であると考えられるところに、謡曲の資料となり得る原因があるのでないだろうか。例えば、武将の最期を描くにしても、先に挙げた曲を見てもわかるように、人々が感動せざるを得ない位劇的に構成されており、私たちはその武将に何かしら悲しい詩や旋律を感じるのである。つまり、平家物語の詩的要素は修羅能の内に潜む幽玄につながるものなのであろうと、私は思うのである。

また平家物語には、文学性のほかにもう一つ重要な要素がある。それは仏教である。平家物語は時代を象徴した文学であるが故に、当時の人々の思想が顕著で、浄土教の色彩が濃い。鎌倉時代から室

町時代にかけて、仏教は新興宗派がいろいろと現われたが、因果応報の思想は根強く残っていたので、この思想は平家物語にも謡曲にもみることができるのである。時代によって物の評価が変わるのは当然のことであるが、平家に対する評価も鎌倉時代初期と室町時代とは大きく違ってくる。室町時代になると、鎌倉時代には憚られた平家に対する哀傷の念が強く出てきたであろうと思われる。室町時代に琵琶法師によって語られた平家物語は、特にその傾向が強かったであろう。この平家物語を聞いて、世阿弥はどのように受取ったのであろうかと考えていくと、やはり、平家への哀傷の念から、武將の活躍や見事な最期をほめてその菩提を弔おうとしたのではないかという考えに落着く。能の構成をみても、武將が幽霊となつて現われてワキである僧に供養を頼むというのがパターンになっているので、そう考えることができると思う。一方、琵琶法師が平家物語を語るということにはどういう意味があつたのかを考えてみると、それは平家の人々の霊を慰めるためであつたのかを考えると、「耳なし芳一」の話を思い起こしていただければ、すぐに納得していただけると思う。まわり道をしてくどくどと書いたが、要するに平家物語においても修羅能においても、平家の武將の菩提を弔うという意図があると思われるのである。観世寿夫氏が「申樂における祭祀的呪術性が平家物語にもある」と述べておられる。しかし、この呪術性という言葉よりも、もっとわかりやすく、鎮魂とした方がよいように思うのであるが、どうであらうか。

今までの論を整理すると、修羅能の内に潜む幽玄を平家物語の詩的要素に見出したから、また、両者とも平家の武將の鎮魂を主意と

しているから、平家物語から多く取材されたのであるということになるのであるが、これをそのまま結論とするわけにはいかない。なぜならば、平家物語を典拠とする修羅物でない曲、例えば、「小督」「千手」のような曲には、まったく当てはまらないからである。

修羅物でない曲について、平家物語との関連性をどう説明するか。また、能という媒介物を通して、平家物語と源氏物語・伊勢物語とに共通するものは何であるか。この二点についても考えていかなければならないのである。(しかし、この二点は結局は同じ所に帰着するのであろうと思われるのであるが……)ただ後者については、馬場あき子氏が世阿弥の創作術についての話の中で、「『平家物語』のままにかくはずの『忠度』の能に、須磨という地名のゆかりをたよりとして流瀧の光源氏の面かけを加えることによって、前シテの老尉に妖しい艶を添えるという完璧な名手の手法」と述べておられるのを読んで、なるほど、そういう考え方もあるのかと、これからの論の発展の大きなきっかけを得て嬉しく思っている。

平家物語と謡曲という大きな題をつけたものの、こういうテーマについて考え始めてからまだ日が浅く、寄せ集めの知識と独断とで論を進めてしまったが、考えれば考えるほど問題が深くなつていくので、もっと腰を落着けて、これからもじっくりと考えていこうと思つている。

あ お ぐ 会 報 告

これまで我クラブにおきましては、部員数に比較して袴の数が不足しており、発表会の時には他大学から借りるなど、いろいろと不便を感じておりました。この度、宇治先生の御発案により、先輩方による謡会を催し、その役料をもとに袴を作成するという趣旨の「あおぐ会」を、昭和五十二年七月十日、湊川神社能楽殿におきまして開催致しました。その経過・結果を、この紙面を借りてお知らせ致します。

宇治先生、荒川会長をはじめ、多数の先輩方、それに宇治先生社中の方々の御協力によりまして、番組は後掲のように立派なものとなりました。そしてその役料と、当日御都合が悪く御越しいただけなかったにも拘らず、会の趣旨に御賛同くださった方々の御芳志により、新しい袴（男子用八着、女子用七着）を揃えることができました。また、当日御出席・御出演くださった方々、御芳志を賜わった方々全員の御名前を芳名録に記させていただきました。

私共学生一同、心より感謝しております。厚く御礼申し上げますとともに、御協力いただきました皆様の御志に報いるべく、今後一層努力を重ね、風韻会をさらに発展させてゆこうと決意を固めております。

素 謡 番 組

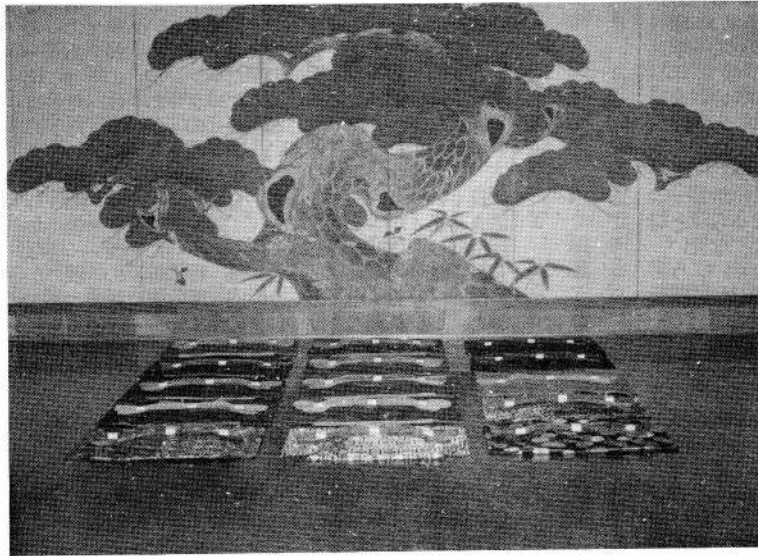
神歌	藤井 茂(旧1) 児島 新(新24)
高砂	坂口 功 宮飼恵夫 久保田悟
田村	松田幸次郎(旧14) 初田隆一
熊野	広野勢津子 田中恭子 岡崎啓子 香西千秋(新25)
三井寺	山口 剛(新22) 志智敏一(新21)
放下僧	横山博江(新22) 森 章子(新24) 小田裕美(新21)
弱法師	戸次威左武(新13) 段野治雄(新13)
小督	牛田真弓 吉留敦子 芥川美和子(新17)
	高島千明(新19)
通小町	里井三千雄 牧 千雄(新4) 原 敏郎(新9)
後寛	西尾雄一(旧5) 山家 猛(新2) 児島 新(新24)
蟬丸	南 恒子 高橋美智子 角石信子
葵上	前田紀一郎 森沢展裕 井上文男(新11)
頼政	久下昌男(新11) 中島圭悟(新10)
三輪	堤 文男(新6) 河野 豊(新20)
鶴飼	大角征矢(新2) 保坂 昌(新1)
藤戸	荒川祐吉(会長) 米花 稔(旧5)
安宅	伊藤欣二(旧12) 加藤芳雄
	(仕舞)
山姥	高島千明
井筒	横山博江
班女	志智敏一

あおぐ会会計報告

椅代金	461,000
舞台使用料	54,000
事務員謝礼	18,500
懇親会費	109,380
名札	2,400
写真代	5,610
印刷費	16,000
郵便代	15,990
雑費	650
残余金	112,570

※ 残余金は、宇治先生の御指示を
あおぎ、部の充実に充当させていただきます。

玉之段 栗村かほる
野守 河野 豊 他に学生仕舞十六番・連吟二番でした。
○当日出席下さった方々(敬称略)
岡本政治郎、和田慎三、松村有芳、木村富士夫、寺本博行
○郵送にて御芳志賜わった方々(敬称略)
国重 猛、小山健一、虎川松郎、鈴木春男、小杉岩蔵、高岡幸彦
道場清隆、山崎秀雄、近藤哲久、湯朝憲之、山中明、伏見正章、
林 陽子
○社中の方々に御協力いただいた方々
宇治みつ子、谷口全弘、土井ひさる



—新着の袴15着—

五十二年活動報告

副幹事長 樽本玲子

幹事学年を終えて

幹事長 遠藤 隆

この一年をふり返ってみますと、さまざまの事が頭の中に浮かんできます。一つ一つの行事を消化してゆく過程、結果。クラブの状態、練習方法、人間関係、自分自身のクラブにおける態度（どうも最後まで鬼になれなかったようです）。これでいいのかと思いつつ幹事交代の時期をむかえてしまいました。

現在のクラブにあって大切なことは、伝統を守ろうとすることではなく、その中からさらにより良いものを作り出してゆこうとする努力を忘れないことだと思えます。そしてこの考え方をこそ風韻会の伝統とすべきであろうと思えます。

去年は、クラブにとって記念すべき四十五周年という年でありました。宇治先生をはじめ、荒川先生ならびに諸先輩の皆様の御指導御協力を賜りましたことを深く感謝致しますとともに、この紙面を借りまして、御礼申し上げます。自分自身、この一年の経験が無駄なものとならないよう、これからもがんばっていききたいと思えます。

「この一年は六ヶ月しかなかった」というのが今の実感です。何か行事のあった月しか記憶に残っていないのです。

副幹事長の仕事は、幹事長の補佐及び代行といわれても、何をしたらよいかかわからず、また幹事長がしっかりしていたので、たまにミーティングの司会をする程度でほとんど何もせずに終ってしまいました。ただ夏頃から、「部内の統制・部員の和」というものを念頭に、皆の（といっても、どうしても女子に限られてしまうのですが）良き相談役となり、まとめ役になろうと心がけてきました。私にそのような器量があるとは思っておりませんでした。そんなにか要領がわかりかけ、これからと思った時には、すでに幹事交代の時期になっていました。しかし、これから卒業までの一年間、今までと同様に、良き相談役となれるよう心がけていきたいと思えます。

涉外 大西章博

「幹事学年を終えて」という題で、何か原稿を書けと言われた。何を書いていいのかわからないし、月並な事を書く気もおこらない。だから、つれづれなるままに今の僕の心境をつづってみよう。

今やもうクラブに関する仕事もほとんど終わってしまった。正直言って、僕はほっとして息をついている。もうこれで役目は終わっ

たと。もっともたいした仕事をしたわけじゃないけど、でも、やっぱり・・・もちろん、反省すべき点も多くあった。でも、僕の性分なのかどうか、今だに「失敗したなあ」と気にやんで後悔するようなことは別になかった。僕は失敗をよくよと気にする方ではないし、それより、次の機会にその経験をいかそうとするほうだから。

近頃、時々ふっと思う。来年の幹事学年の諸君は、どんな風にクラブを運営してゆくのだろうと。彼らも僕らみたいにつまずいたり、悩んだりしながらも、あしたり、こうしたりして、彼らだけで立派にやっていくのだろうなあ、と思ってみたりする。そんなことを思ってみるのが妙に楽しく、そしてさびしい。

クラブと学連の谷間

学連副委員長 伏見和政

我がクラブにおいて学連の役員、委員として活動した経験のある人は必ずと言っていい程、学連はいい所だからもっと積極的に参加して欲しい」という内容の事を言っています。これは、彼らにとって学連が積極的に参加するだけの価値を持っているという事を示すと同時に、彼らから見ると風韻会の他の人達が学連に対して必ずしも熱心ではなかった事を言っているのだと思うのです。これに対して一般連盟員（我がクラブにおいては役員、連盟委員以外の部員）の学連に対する意見の多くは「関心がない」、「つまらない」、「連盟委員や役員の社交の場所である」等々で、その把え方は大抵の

場合、批判的であります。同じクラブで活動しながら何故、このように見解が異なるのでしょうか？ 学連が二百数十人から成る大きな団体であり、それを直接運営している人間とそうでない者との考え方には差があつてしかるべきだという意見もあるでしょう。しかしそれは非常に消極的な意見で問題の解決にはなり得ません。まず考えなければならぬのは、学連を構成しているのは各大学のクラブであり、この構成単位であるクラブの意志及び利益を統合して存在しているのが学連という組織である、という事です。そこでクラブは何らかの意志を持って、何らかの利益を求めて、学連に参加すべきなのです。神大風韻会は、昭和二十六年にこの組織が現在の関西学生能楽連盟という名称になるずっと以前から加盟しています。長い年月の間に学連も様々な点で変化し、それに伴って我がクラブの学連に対する参加の態度も変化してきたであろうと思われます。そして、現在では学連に対する参加がクラブ全体としてよりも各個人に委ねられている部分の方が大きくなってきているようです。ですから、個人によって学連に対する意識の差が生じるのも当然の事だと言えるかも知れません。学連に対しての個人単位の参加はもちろん大切な事ですが、その根底であるクラブ単位での参加の姿勢をもっと考えて行かなければならないと思います。

この一年間、学連執行部の副委員長と同時にクラブの幹事学年の一人として、クラブと学連の谷間を歩いてきた僕は、努力不足のため二つの山の橋渡しを充分にする事ができませんでした。近い将来、二つの山がさらに大きな一つの山になる事を願ってやみません。

幹事学年を終えて

渉内 井戸 正二

思えば短い一年間であった。渉内を務めて何をしてきたのだろうか
と考えると、はなはだ自分の曖昧さにはずかしくなる。幹事長を中心
としてクラブの運営・行事にあたる、時には議論し合ったり。幹事
長のみを負担をかけたこの一年間である。

反省みたいになるけど、クラブの運営はもちろんだが、下級生、
上級生にとわずクラブ員みんなの団結、折合が一番大切に思う。ク
ラブが自分の家庭であること、自分の悩み、不安を気軽に相談しあ
えるような場であること。その中から謡・仕舞を学び、やがては社
会に出てゆく、おそらく謡・仕舞から離れた人間になってゆく。し
かしこのようなおし流されて生活する自分でも、単調に過ぎ去った
年月でも、第二の家庭のようであれば……。

最後に中途半端に終わった一年間だったが、はや後輩が幹事をする
のかと思えば、やれるときにはやとくんだったと思う次第だった。
とにかく後輩のみなさん、大いに奮闘してほしい。

学連委員 岩崎 誠

幹事学年を終えて、今思うことは本当に行事が多かったなあとい
うことである。行事の方はどうにか消化してきたかもしれないが、
僕たちが幹事学年になる前に言っていた「行事にだけ振り回わされ

たなあと言われぬように頑張ろう」という言葉を考えてみると、
皆それぞれ考え方により異なるかも知れないが、やはり言われるよ
うになった感じも受ける。それはクラブが行事だけ消化すればいい
んだというものでなく、特に練習において、またその他の時におい
ても、人間関係が多いに大切になってくるということである。

僕が一番痛切に感じたことは、この人間関係のむずかしさであった。
ところで、この一年昨年に引き続き、学連委員を担当して、春に
は月並会の実行委員長、秋には秋季大会の実行委員としてやらせて
もらった。秋季大会に関しては、春季大会に引き続き各パートの個
性を出し、時間的平等をはかるために、時間制で行なったのである
が今年僕が見るからに今までは違ったよさがあり、成功であっ
たと思う。また、秋季大会の存在性について、各パートが自演会シ
ーズンと重なるため、かえって各パートの負担となり、とても啓蒙
しあうような舞台は望めず、その意義も見い出せないと危ぶまれて
いたが、実際に皆にこの考え方に対する奮起が起こったのか、非常
に充実していたと思った。

最後に、連盟に関して感じたことは、一人一人が学連に対して受
動的であっては、何も得られないから、もっと能動的に働きかけ、
単に他校との交流、親睦というのではなく、発表の場でもこれを
もっと刺激の場として技術向上の為、利用していった方がいいと思
った。

幹事学年の終わりに

書記 松井令子

本来ならば、誇りと感慨とをもって書けるこの原稿を、今私は居たたまれない気持で書いている。一年間、一体何をしてきたのだろうかと思う。私にとって、幹事としての一年は本当に自分を風韻会のものにし、風韻会を自分のものにできる良い機会になるはずであった。

私の反省の言葉はただ一つ「自覚に欠けていた」こと。この最大にして最悪の反省。毎日毎日移り変わるクラブの様子を正確に知ろうとしなかったことも、それに伴う改善策を考える努力を惜しんだことも、すべてこれに言及される。その結果、七人の幹事の方々に全面依存する形となってしまう。今になって思えば、たとえ非力であっても私は私なりに一貫した方針をもってクラブにあたるべきであった。どんな小さな目標も、それを地道に実行していれば、又違った一年になったろうにと悔やまれてならない。

新幹事の方々、一年は早いです。どうぞ私のようにしり込みをすることなく、自分の可能性をクラブに注ぎ込んでみてください。風韻会はそれだけの価値があるというのが実感です。そして幹事五人がなごやかな中に一致団結すれば、それがそのままクラブの雰囲気にも反映するでしょう。頑張ってくださいることを祈りつつ、迷書記松井令子の懺悔録を閉じることになります。

幹事学年を終えて

会計 黒川晶代

この一年間をふり返ってみますと、役目柄とはいえ、皆と顔さえあわせれば、「部費」「部費」と叫んでいたように思われます。数字には全く弱い私に、会計なんて勤まるかしら……と不安と心配で一杯のスタートでしたが、何とか無事に終えることができました。また、会計としてというよりも、幹事学年の一員として、クラブ全体について、あるいは幹事学年についてなど、いろいろと考えさせられた一年間でもありました。その意味において私にとっては、充実した一年間であったといえるかも知れません。しかし、結局、会計という名目のもとに、部費の集金人に終わってしまったことに對して、深く反省と後悔の念を覚えます。

DPEサービス
カラープリント美しい仕上り

阪急六甲駅南出口東へ浜側

六甲ユニ写真店

821-2477

あしあと

昭和五十二年度

五月 四日 第二十一回旧三商大交歓会 於学館六階ホール

我教主催であり、六甲山ハイキング、発表会、コンパと、順調に終えることが出来た。

十三日～十五日 シュニア合宿 於摩耶山大蔵院

木村、浦田先輩参加して下さる。

三月一日～七日 春合宿 於滋賀県伊香郡余呉町正源寺

何十年ぶりの大雪にみまわれたが、初めての人もあり、思い出深い合宿であった。

十七日 四年生慰労ハイキング (鞍馬寺から貴船神社へ)

十九日 歓送謡会 於神戸大学六甲台講堂

舞囃子「敦盛」(広野) 「船弁慶」(林)

「羽衣」(岡崎) 「菊慈童」(香西)

「忠度」(小島) 「熊坂」(田中)

「高砂」(伏見)

宇治先生をはじめ、荒川会長、栗岡、井口、米花、福光、伊藤、松田、牧、里井、原、中島、前田、久下、井上、段野、木村、加藤諸先輩の参加を賜わり、二十五回生七名をお送りする。

四月 一日 新入生勧誘(オリエンテーション参加)

男子四名、女子二名が入部

六月 四日 新入生歓迎コンパ 於六甲パーラー

十九日 学連春季大会 於大槻能楽堂

連吟「鉄輪」「花筐」仕舞「合浦」「小袖曾我」

「杜若」「敦盛」

二十五日 古典芸能発表会 於学館六階ホール

二十六日 四大学交歓ソフトボール大会 於神戸大学

七月 三日 四大学合同発表会 於上田能楽堂

十日 ちいさなおく会 於淡川神社能楽殿

宇治先生御提案によるもので多くの先輩の出席や寄付により、計十五着のハカマが出来る。

八月三日～十日 夏季合宿 於兵庫県美方町民宿イヌワン

木村、浦田、伏見、広野、田中先輩が参加される。

十一月十二日 園遊会模擬店出店(六甲台キャンパス)

十九日 四十五周年記念発表会 於学館六階ホール

舞囃子「松風」(樽本) 「敦盛」(遠藤)

洋酒センター

サントリー会館

神戸・三宮生田筋(金剛山地下)
TEL. 神戸(078) 321-4902

●営業時間 PM5:00→PM12:00

※アルバイト歓迎(御世話下さい)

高級スイス菓子
デンマークパン
サンドイッチ

ケルン

阪神御影駅前	☎神戸	(078)851-7651
国鉄本山駅北	☎神戸	(078)451-0064
阪急夙川駅前	☎西宮	(0798)34-2121
六甲道生協前	☎神戸	(078)841-3933
阪神深江駅前	☎神戸	(078)453-0572
本社	☎神戸	(078)841-0720

十二月十一日

十七日

学連秋季発表会 於上田能楽堂
 連吟「菊慈童」「富士太鼓」
 仕舞「嵐山」「艦」「殺生石」「清経」「松風」
 謡納会 於六甲台部室
 クリスマスコンパ 於富貴

「班女」(黒川)「高砂」(伏見)

その他連吟二番仕舞二十一番先輩出演曲五番
宇治先生をはじめ、荒川会長、藤井前会長、内海、
青木、杉本、牧、里井、堤、広井、原、松岡、
久下、佐々木、段野、戸次諸先輩の御出席を賜り、
盛会のうちに会を終えることが出来た。

新役員紹介

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事
副幹事	副幹事	副幹事	副幹事	副幹事	副幹事
渉外・文総	渉外・文総	渉外・文総	渉外・文総	渉外・文総	渉外・文総
学連役員渉外	学連役員渉外	学連役員渉外	学連役員渉外	学連役員渉外	学連役員渉外
計	計	計	計	計	計
S 29	P 28	P 28	T 28	P 28	J 28
古沢	岡田	日下	戸田	福岡	田中
智	裕子	恵津子	真弘	真裕子	千晴



阪神御影駅前 TEL 811-8384(1F)

スポーツ用品のことなら

御影スポーツ・センター店

神戸市東灘区御影本町4丁目7-17
阪神御影駅前
TEL (078) 811-6314

幹事長就任にあたって

J 28 田中千晴

この度、神戸大学風韻会の幹事長に就任することになり、身のひきしまる思いがしているところです。

さて、神戸大学風韻会も四十五周年を迎えたのですが、その活動においては、サークル員のサークル観が多様になってきた今では、運営方針もどこに基準をおくか難しくなっていると思います。

神戸大学風韻会の目的は能芸術の追求、会員相互の親睦を図る事が掲げられています。しかし、全学生的な傾向であるとともに、神戸大学風韻会内部においても進行しているサークル意識の変化に即して今一度練習体制を含めた基本方針を、視点を変えて考えてみる時代になったのではないかと思います。

最後に、宇治先生はじめ顧問教官並びに諸先輩方に宜しく御指導賜われますようお願い申し上げます、幹事長就任の挨拶にかえさせていただきます。

昭和五十三年度行事予定

3月3日～7日	春合宿
18日(土)	歓送謡会(於学生会館六階ホール)
20日(月)	慰労ハイキング
4月上旬～下旬	新入生勧誘期間
22日(土)	宇治先生演能(於大槻能楽堂)
5月4日(木)	旧三商大合同発表会(主催市大)
7日(日)	新入生歓迎ハイキング
6月18日	学連春季発表会
7月2日(日)	四大学合同発表会(於上田能楽堂)
8月下旬	夏合宿
11月18日(土)	秋季発表会(於学生会館六階ホール)
12月16日(土)	クリスマスコンパ

決 算 報 告 書

自昭和52年 1 月 1 日

至昭和52年12月31日

収 入		支 出	
今期徴収部費	3 0 7, 2 2 5	先生謝礼	1 7 4, 0 0 0
大学援助金	4 7, 0 0 0	45周年寄付金	2 5, 0 0 0
先輩寄付金	2 3 6, 2 3 0	四大学	1 4, 2 0 0
風韻 広告料	7 1, 6 0 0	秋季発表会	1 3 9, 7 3 0
発表会役料	1 1 9, 5 0 0	歓送謡会	1 4 4, 5 3 0
繰越金	4, 2 5 2	学連役料	1 2, 0 0 0
		学連費	2 4, 0 0 0
		風韻 名簿 印刷費	1 5 0, 0 0 0
		通信費	7 7, 0 2 5
		文具費	4, 4 6 0
		写真代	8, 8 7 0
		雑支出	3, 6 8 1
		来期繰越金	8, 3 1 1
	7 8 5, 8 0 7		7 8 5, 8 0 7

伝
言
板

松本 恵子 家事手伝

中井ますみ 中井事務所

飯田 寿子 教 員

今井 基博 住友金属

就職決定

荒川会長、経営学部長に！

(新住所は30・31ページに)

飯田博江さん(旧姓横山・二十二回生) 御結婚！

茨木美千代さん(旧姓加藤・二十二回生) 御結婚！

中川憲一さん(二十二回生) 御結婚！

河野 豊さん(二十回生) 御結婚！

編集後記

ここに「風韻」第十八号をお届け致します。発行に際しまして、原稿をお寄せ頂きました皆様方に深く御礼申し上げます。

本誌編集にあたっては、特別の方針はたてなかったのですが、寄せられた原稿がその方向を大いに位置づけてくれました。それを活かされたかどうかは疑問ですが。

ところで本の編集がこんなに大変なものとは！まず、原稿の引き出し。辞書を片手ににらめっこ。十年ぶりの対面の漢和辞典でした。今度はどこに広告をおさめようか、こんなところから始まるのはおかしいとか、配置に大いに頭を使った次第です。（それが成功しているかどうかは、どうぞ誰も問わないように）何度も手にして読んで十四号から十七号の風韻。そのうちの「二宮金次郎の教え」。人間、同じ立場にたたされなきゃ本当に相手の気持なんぞは、ちっともわかりはしないんだってことが痛感させられました。

ともあれ、風韻会は私の心のふるさとです。
皆さんも、そうですよね?!

編集委員

今井 基博
山岸 国夫
飯田 寿子
田中 明子
中井ますみ
松本 恵子

昭和53年 4月 8日 印刷

昭和53年 4月10日 発行

発行所 神戸大学風韻会
神戸市灘区六甲台町

印刷所 みなと出版印刷株式会社
神戸市灘区浜田町2丁目5の3
電話 821-8331(代)

雑誌からコピー印刷まで……

みなと出版印刷(株)

阪神新在家下車東150米高架下12-11
TEL.(078)821-8331(代)

大衆酒場 コンパ・宴会にぜひどうぞ

ぜい六

旧市電六甲口下ル西角 電話 (851) 4787